

## 5. 3年保育5歳児T児

高本 洋

T児はよく話をするが、自分の思いをひたすらしゃべることが多く、その場に合わない話題をいきなり持ち出すこともある。大人には理解してもらえるが、友達同士では、応答関係が成り立っていないことが多い。そのためか、3歳児の時からつながりのあるH児、G児には自分からかかわっていくが、それ以外の友達には進んでかかわろうとしない。教師が近くにいると教師に話しかけることが多く、弟がいる4歳児にかかわりを求めたりすることも時々ある。やはり、同学年の友達と一緒に遊ぶ中で、思いを伝え合うことができるようになってもらいたいと考えている。

T児は5歳児になってから、友達との会話が上手くいかないことに不安を感じ始めるようになってきた。そのために、自分の言いたいことを遠慮してしまう姿や、自分の思いを素直に出さずにごまかしてしまう姿が時々見られている。

### 事例1 「いい、見てる」

5月23日(水)

遊びの時間、T児はH児、G児らと砂場で遊んでいた。山にトンネルを掘り、そのトンネルに水を流し込んでいた。

しばらくすると、H児とG児が砂遊びをやめ、サッカー遊びに入った。T児はサッカー遊びには入らず、けやきステージに座ってサッカー遊びを眺めていた。

T児 「H児くん、がんばれー」

H児を応援するT児の声がした。教師はちょうど幼児らと一緒にサッカーをしていた。T児がずっとサッカー遊びを見ていたので、T児に声をかけた。

教師 「T児くんも一緒にサッカーしない？」

T児 「いい(やらない)、見てる」

教師 「やった方が楽しいよ」

T児 「ぼくは見てる方がいいの。今はH児くんを応援してるの」

教師 「そうなの。じゃあ、やりたくなったらおいで」

T児 「……」

T児はしばらくその場でサッカーを眺めていたが、途中から迷路やケーキ屋さんなど、他の遊びの場を転々としていた。H児とG児はかたづけまでサッカーを続けていた。

## (1) T児の自己表現のあり方

### ○自分の気持ちをごまかす表現

4歳児の時に一緒に砂遊びや製作をしていたH児が、5歳児になってからサッカー遊びをすることが多くなった。T児はサッカー遊びをしたことがなく、H児がサッカーをしている日は、事例のようにいろいろな場を転々としていることが多かった。サッカーというこれまでやったことのない遊び、チームやルールなど複雑な要素が混在する遊びへの不安もあるだろうが、それ以上に、T児は友達とのかかわりに不安を感じているようである。これまでもH児以外の友達とT児は一緒に遊び、遊びの中で話はしていたが、T児の一方的な言葉が多く、友達との応答関係が成り立っていなかった。T児自身も、友達との会話のやりとりがうまくいかないことに戸惑いを感じ始めているようである。そんな中で、本当は自分もサッカーをやりたいのだけれども、友達とのやりとりに不安を感じているために、やりたい思いを友達はもちろん、教師にも出せずに自分の気持ちをごまかしてしまっている状態であると捉えている。

## (2) T児の社会的側面の学んだこと

### ○気持ちをごまかすこと

教師がT児の言葉を尊重してしまったために、T児は自分の気持ちをごまかしてその場を過ごしてしまった。そのことは、自分の気持ちに向き合わなくてもごまかしてすり抜けることができることを経験させてしまったことになるのではないだろうか。

### ○モヤモヤした気持ち

自分のやりたいことができず、しかもその気持ちも押し殺して、ごまかしてしまっている。そんな状態では思い切り遊べるわけがないし、ほかの遊びの場で遊んだとしても、すっきりしない、モヤモヤとした気持ちが残るだけであろう。

## (3) 今後に向けて

まず、自分の思いを素直に出せることができるようにしたい。

また、友達の前で話すことに不安があるのだから、友達の前で話をする場を設定したり、話したことが友達に認められたり、友達が受け入れてくれたりする経験をさせていきたい。



わくわくワールド(宿泊体験)を終えた翌週、これまで担任が行っていた朝のつどいの司会を、幼児らに委ねようと思い、ホワイトボードに司会の言葉を書き、今日の当番であるC児、T児、G児の3人のネームプレートを、一人一文ずつ言えるように言葉の頭に貼っておいた。

みんな「おはようございます」

教師「今から朝のつどいですが、今日から当番さんに司会をしてもらおうと思います。」

男児ら「え〜〜」

D児「先生、ホワイトボードに書いてあるやつ？」

教師「そう、気づいた？みんなわくわくワールドで、食事のあいさつや入所のつどいのあいさつの言葉をたくさん練習して、上手に話ができるようになったでしょ。」

(幼児らうなずく)

教師「だから、もうみんな、つどいの司会もできるかなと思って…。今日の当番は…赤グループさん、早速やってみましょう。」

C児、T児、G児の3人が出てきた。堂々と大きな声で話し始めた。

C児「今から朝のつどいを始めます」

T児「みんなに話したいことはありませんか」

みんな「……………」

G児「先生のお話です」

教師「お話したい人がいたら、『ハイ』って手を挙げて、お話してね。

それより、みなさん、当番さんの司会、どうだった？」

D児「上手だった」

J児「T児くんの声、大きかったよ」

教師「みんなもそう思った？当番さん、今日初めて司会したのに、とても大きな声で、しっかり言うことができたね。J児くんはT児くんの声が聞きやすかった？みんなも赤グループの言い方、お手本にしてね。」

C児とG児がニコニコとうれしそうにしている横で、T児は顔を赤くして照れくさそうにしていた。

### (1) T児の自己表現のあり方

#### ○集団活動における表現

T児は、行事やクラス活動等、決められた活動には積極的に取り組むことができる。全体を通して初めての朝のつどいの司会で、堂々と大きな声で言葉を言えたことには正直驚いたが、

ホワイトボードに言葉が書いてあり、言う言葉もネームプレートで示されていたことが、T児にはよかったのだろう。加えて、前週のわくわくワールド(お泊り保育)におけるキャンプファ－ヤーの司会やそれにかかわる練習で、大きな声ではっきり言う練習を積んできたことが、自信になっていたようだ。

### ○ルーティンの活動における表現

一日の見通しをもって主体的に生活を進めていくために、毎日、朝のつどいをしている。この日以降、3～4人の当番が、毎日交代で司会をすることになり、司会の言葉は毎日繰り返されている言葉になっている。この日は当番が司会を初めて行った日ではあったが、これまでに教師が毎日繰り返し司会の言葉を発していたことがモデルとなっていた。

### (2) T児の社会的側面の学んだこと

#### ○教師や友達に認められたうれしさ

大きな声でしっかりと言えたことを友達や教師に認められたことで、顔を赤くして照れくさそうにしている姿から、褒められて恥ずかしいけどうれしいという気持ちが伺える。しかも、みんなの前に立っているという状況も、そのうれしさを強めていると考える。

### (3) 今後に向けて

T児を認める言葉をかけたり、友達にどうだったかを聞くような言葉を発したりしたことが、T児の自信につながったと捉えているが、T児の評価にこだわりすぎて、T児と友達をつなげる援助がほとんどなされなかったことが反省として挙げられる。友達とのかかわりに不安を抱いているT児だからこそ、必要な援助であった。今回の事例のような集団の場では、T児と友達をつなぐ援助を心がけていきたい。

また、このような集団の場は、いわば表現することが保障された場でもある。幼稚園では、遊びの場こそが力を発揮する場であり、T児の真価が問われるのではないだろうか。今後は、遊びの場における、T児と友達とのかかわりを追跡観察していきたい。



2学期が始まって間もない頃、朝のつどいの後、T児が教師に話しかけてきた。

T児 「先生、一緒にサッカーしよう」

1学期にサッカーをしたことがなかったT児に誘われたので驚いたが、同時にうれしく思い、すぐに返事をした。

教師 「うん、わかったよ。でも先生、連絡帳見てから行くから、先にボール蹴って待ってて」

T児 「うん、わかった、先行ってるね」

T児は先に外へ出て行った。しばらくして教師が行くと、

T児 「先生、こっちのチーム入って」

教師 「OK」

T児 「みんなあ、先生黄色チームに入るよー」

G児、L児ら 「うん、わかったよ」

T児 「先生、T児キーパーしてるから前にいて」

教師 「わかったぞ」

その日、T児はずっとサッカーを続けていた。

朝、着替えが終わるとすぐに、T児が話しかけてきた。

T児 「T児、今日もサッカーするよ」

教師 「そうなの？そういえば昨日、シュートいっぱい止めてたもんね」

T児 「うん、今日もT児キーパーする」

遊びの時間になると、T児はL児、P児、G児、Y児、X児らとサッカーを始めていた。教師はサッカーの仲間には入らず、ゴールの後ろにいてT児と話をしていた。

教師 「あっ、T児くん、ボールが来たよ」

T児 「よし、こい」

シュートされたボールをT児が次々と蹴り返していた。蹴り返されたP児らがT児に向かって言った。

P児 「T児くん、意外とうまいなあ」

L児 「なかなか決めれない・・・」

T児は照れながらもうれしそうな表情をしていた。

教師 「T児くんのキック、強いねえ」

T児 「うん、T児、いつも足鍛えてるからね」

G児 「えっ？どうやって？」

T児 「こうやって膝を曲げて・・・」



と言いながら、スクワットのように足を曲げ伸ばしし始めた。と同時にボールが飛んできて、ゴールに入った。

P児 「やったあ」

T児、G児、教師 「あゝ~~~~~」

T児 「くそー、油断したあ」

そう言うと、そのゴールされたボールを力強く蹴り返し、再びサッカーを続けた。

### (1) T児の自己表現のあり方

#### ○自分の思いを素直に出す表現

1学期はサッカーをやりたいという思いがあっても、素直に「やりたい」と言えないでいた(事例1)。2学期になり、事例3-①のように、T児はやりたい思いを素直に出せるようになった。

#### ○教師を媒介とした表現

以前は自分の言いたいことをひたすら言うようなところがあったが、本事例では、「みんなあ、先生黄色チームに入るよー」のように、一緒に遊んでいる仲間を意識した言葉や、「こうやって膝を曲げて・・・」のように、友達の質問に答える言葉が聞かれるようになった。

しかし、どちらも教師が絡んでの会話であり、それ以外の言葉も、教師に話しかける言葉や教師の言葉に反応して発した言葉といった対教師の自己表現である。自分から友達に声をかけることはほとんどない。また、「T児くん、意外とうまいなあ」という友達の言葉に対しては、何も返していない。最後の「くそー、油断したあ」という言葉は、友達に言ったというよりは

むしろ教師にアピールしている言葉であると考えられる。これらのことから、サッカーという遊びを友達と一緒にしてはいるが、T児の中に友達の存在が弱いことが伺える。

## (2) T児の社会的側面の学んだこと

### ○友達と同じ場でサッカー遊びをする楽しさ

この事例以降も、T児はサッカー遊びを続けていた。サッカー遊びの楽しさを味わったからではないかと考える。ただし、「ボールを蹴る」「シュートを止める」といったサッカーの動きそのものの楽しさは十分に味わっているが、友達と一緒に遊ぶ楽しさまでは至っていないと捉えている。

## (3) 今後に向けて

今後は、サッカー遊びのように自分から進んで楽しむことができる遊びを通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるよう、また友達の存在を意識した自己表現ができるよう、援助をしていきたい。

### 事例4 「どっちのチームに入ればいい？」

11月22日(木)

前日に続き、T児、P児、J児、Q児、B児、R児、U児、Z児、W児、Y児、X児、H児らがプレイルームでボール蹴りを始めた。しばらくはそれぞれが好き勝手に蹴ることを楽しんでいたが、途中でJ児がボールを手に持ち、みんなに集まるよう声をかけた。

J児 「ストップ、ストップ。誰が同じチームかわからんし一回集まろう！」

その声でみんなが一方(黄色チーム)のゴールの近くに集まった。

J児 「人数数えるね。こっち(白)が1, 2, 3, 4人で、こっち(黄色)が1, 2, 3, 4, 5人、あれ？」

P児 「Q児くんとB児くん、向こうにいるよ」

Q児がもう一方(白)のゴールの前で、もうすでにキーパーになってスタンバイしていた。B児はQ児に何やら話かけていた。T児は端の方にいたためにJ児に数えてもらえず、みんながチームに分かれて動いているのに出遅れ、戸惑っていた。J児がまた数え始めた。

J児 「1, 2, 3, 4, 5, 6人(白)と1, 2, 3, 4, 5人(黄色)。合わないなあ。もう一回数えよう。ねえ、B児くんとQ児くんもこっち来て」

T児 「ねえ、J児くん・・・」

T児はJ児に近づき声をかけたが、気づいてもらえない。

J児 「もう一回数えるよ。1, 2・・・」

T児 「J児くん、T児どっち入れればいい？」

J児 「3, 4, 5, 6人でしょ、こっちは・・・」

T児 「ねえJ児くん、T児どっちのチーム・・・」



J児は数えるのに一生懸命で、しかも動きながらなので、T児の声が届いていないようだ。T児もJ児の背後から声をかけているのでなおさら気づいてもらえないでいる。

J児 「1, 2, 3, 4, 5人。やっぱりこっち一人足りないなあ」

T児 「ねえ、J児くん！」

J児 「ん？」

T児がJ児の肩を叩いて声をかけたので、ようやくJ児がT児に気づいた。

T児 「J児くん、T児どっちのチームに入れればいい？」

J児 「おお、T児くん、ちょうどよかった。こっち（黄色）に入って」

T児 「うん、分かった」

J児 「これでぴったり。始めよう」

T児はほっとした表情で黄色チームに入った。サッカー遊びが始まると、T児もみんなと一緒に一生懸命ボールを追いかけ、蹴ることを存分に楽しんでいた。

## (1) T児の自己表現のあり方

### ○一緒に遊んでいる仲間に対する表現

本事例でT児は、人数を数えているJ児に声をかけている。その場を仕切っているJ児に声をかけたという点では、場の状況を把握していると言えるかもしれない。しかし、実際は一生懸命数えているJ児に声をかけているので、空気を読んでいるとは言えないだろう。また、一緒に遊んでいる仲間であれば、集まっている集に向かって「ぼくも入っているよ」「ぼくも数えた？」といった言葉を発すれば済むことなのに、T児にはそれができない。T児は、本事例の対J児のように、一対一の関係でないと安心して応答関係が築けないのではないかと考える。

また、集に対して言葉を発する際、立ち位置も重要である。みんながどの方向を向いて相談をしているのか、自分の存在に気づいてもらうためにはどこへ移動すればいいのか等、場を読み取って空間を移動することが必要になると考える。



## (2) T児の社会的側面の学んだこと

### ○思いが伝わった安心感

### ○友達が受け入れてくれたうさしさ

これまでのT児は、遊びに入るタイミングを逃すと、自分からは言い出せず、しばらく様子を眺めていたり、諦めて別の遊びを始めたりしていたが、本事例では、自分もサッカーを続けたいという思いをしっかりとってJ児にかかわった。しかし、T児はJ児の背後から声をかけていたため、気づいてもらえなかった。そこで自分の方を向いてもらうために肩をたたいて声をかけた。そのことで、顔を合わせて「どっちのチームに入ればいい？」と聞くことができた。その結果、T児の存在が認識され、T児のサッカーをしたいという思いが伝わり、受け入れてもらうことができた。「どっちのチームに入ればいい？」という言葉は、一見質問している言葉のようだが、今回の場合はそれだけではなく、T児が自分もサッカーをしたいという思いを聞いてもらいたくて発していた言葉でもあると捉えている。

## (3) 今後に向けて

(1)の考察から、今後T児が学ばなければいけないこととして、「場の読み取り」「空間移動」の2つが挙げられる。どちらも頭で考えるのではなく、からだで感じて動くことができるよう援助をしていきたい。

### 事例5-① 「T児、言ってみようかなあ」

2月7日(木)

週末ののびのび表現会に向けて、練習の日々が続いていた。5歳児は創作劇に挑戦し、この日まで劇を自分達で創り上げてきていた。「夢の車に乗って夢探しの旅に出かけ、旅先でがんばっている人たちに会うことを通して、夢や目標をもってがんばるようになる」という内容の劇だった。T児はI児、N児らと同じ役だったが、他の友達に比べて出番が少なかったため、出番を増やそうと思い、声をかけた。(N児は欠席だったため、2人に声をかけた)

教師 「ねえ、T児くん、I児くん。T児くんとI児くんの出番って、最初だけでしょ。最後に、自分の夢やがんばりたいことを言ってみない？」

I児 「俺、いやだ。言いたくない！」

教師 「えー、言ってよう」

I児 「言わなーい」

教師 「T児くんはどう？」

T児 「T児、言ってみようかなあ」

教師 「よし、T児くん、決定。なんて言う？」

T児 「うーん、すぐに思い浮かばないよお。家で考えてくる！」

T児はこの日、体調不良のため早退する予定になっていた。このやりとりも、帰る直前だったため、家で考えてくることになった。

翌朝、T児に確認したところ、「考えてきたよ。ノーベル賞をとりたい! って言うよ」との返事だった。立つ場所やW児の次に言うこと等を確認して、リハーサルを迎えた。

事例5-② 「そんなことないでしょ。夢ってみんなあるんじゃない」 2月8日(金)

劇がどんどん進んで行き、最後の場面を迎えた。

V児 「みんなの夢やがんばりたいことって、なあに？」

P児 「はい、ぼくは、発明家になりたいです」

F児 「わたしは、でんぐりがえしが上手になりたいです」

W児 「ぼくは、サッカー選手になって、ワールドカップに出たいです」

T児 「ぼくは、ノーベル賞をとりたいです」

事前に練習することができなかつたためリハーサルが、最初の練習となったが、T児はしっかりと自分の言葉を言うことができた。一人一人が夢やがんばりたいことを話すたびに、会場から拍手が沸き起こっていた。T児が自分の言葉に拍手をもらいながら、隣に並んでいたI児に小声で話しかけた。

T児 「I児くんは？」

I児 「俺、夢なんてない」

T児 「そんなことないでしょ。夢ってみんなあるんじゃない？」

I児も夢を言うために隣に並んでいたと思って声をかけたT児だったが、自分が聞いたことに対して予期せぬ返答が返ってきたため、困ったような表情になった。横を見ると、I児のさらに隣にN児がいたので声をかけた。

T児 「N児くんは？」

N児 「知らない」

N児はそう言うと、I児と2人でみんなが並んでいる後ろの方へ隠れていった。幸い小さな声でのやり取りだったため、お客さんには聞こえていなかったようであった。T児は怪訝な表情をしながらも、その場に立って正面を向き、劇のフィナーレを迎えた。

## (1) T児の自己表現のあり方

### ○前向きな表現

これまでは、声をかけても遠慮してしまったり不安の言葉が先に出たりするT児だったが、事例5-①では、「T児、言ってみようかなあ」「家で考えてくる」といった前向きな言葉が聞かれた。これは劇という見通しがもてる活動だったこともあるが、これまでの劇の練習を通して、本人なりに自信をもってきたように感じた。また、友達のがんばっている姿も手本や憧れになったのではないだろうか。

### ○友達と一緒にがんばろうとする表現

I児の言葉「俺、夢なんてない」に対して、思わず、「そんなことないでしょ」と切り返したT児。前日、自分なりに一生懸命話すことを考えたからこそ、出た言葉であると捉えている。さらに「何かあるでしょ」とI児に語りかけるところからも、同じ役の友達と一緒にがんばろうとする姿が伺える。

### ○その場に応じた表現

T児は友達の捨て台詞に対して怪訝な顔をしたが、劇の最中であることを踏まえ、普通に振舞ってフィナーレを迎えた。これまでのT児だったら、そんな返事をされたら、もっとオドオドした雰囲気になっていただろう。けれども、その場がどんな場であるのかを自分なりに受け止めて、自分なりに考えて、役割を果たすことができた。T児なりに状況を読み取り、みんなと一緒に創り上げてきた劇を壊さないように気をつけながら、その場に応じた表現ができるようになってきたと言える。

## (2) T児の社会的側面の学んだこと

### ○友達に応えてくれない嫌な気持ち

### ○友達が自分の思いに応えてくれないこともあること

これまで、不安が先に立って友達と向き合おうとしなかったT児が、友達に進んで自分の思いを伝えたことは、大きな成長であると捉えている。結果的には応えてもらえず、嫌な気持ちになったが、友達とかかわっていく上では自分の思いに応えてくれないこともあるということを学ぶことができた。

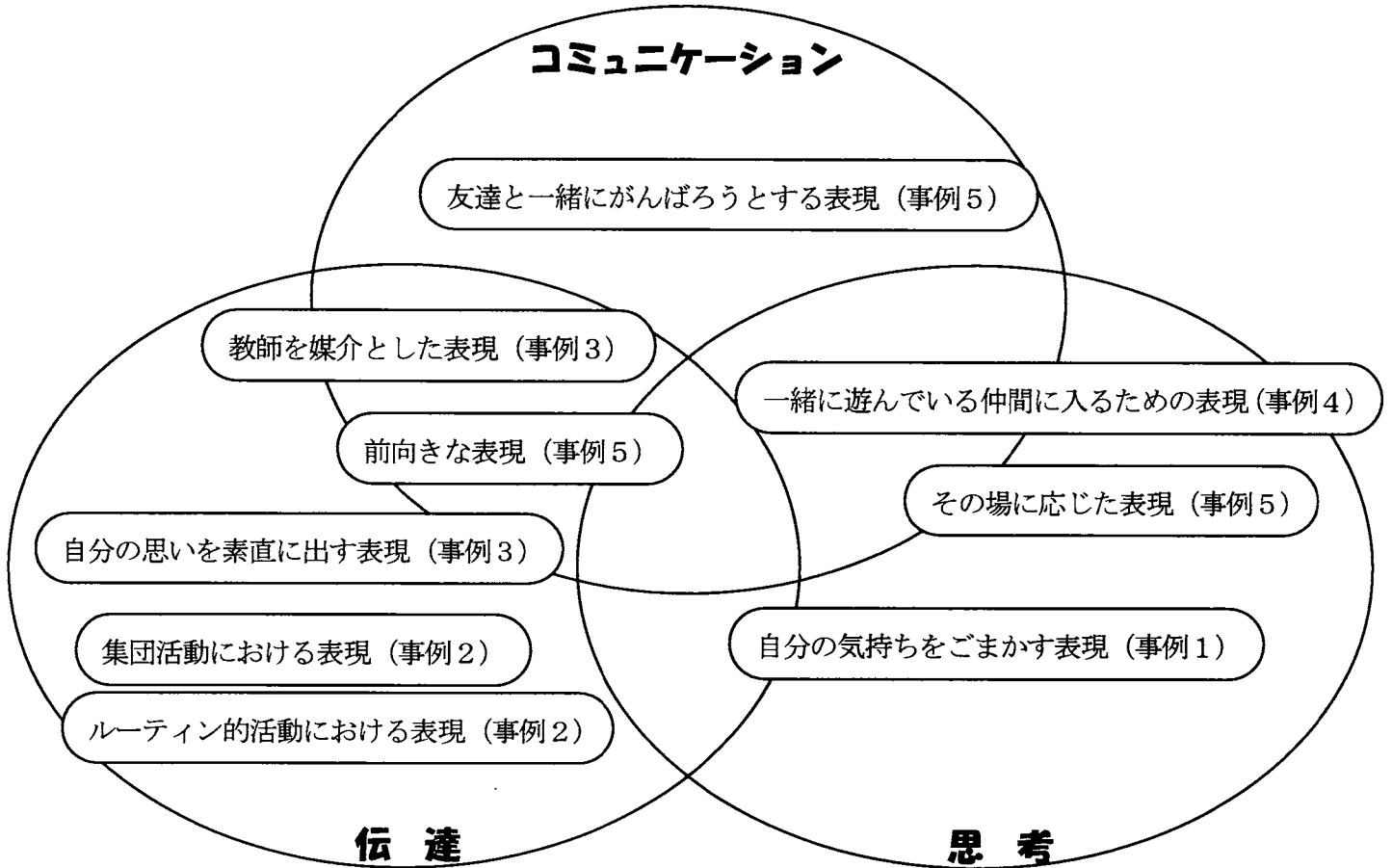
## (3) 今後に向けて

T児は本事例で、自分が前向きな気持ちをもってがんばることで、自信をもって自分の思いを出すことができた。時には嫌な気持ちになることもあるかもしれないが、それはT児が友達とコミュニケーションをとっていく上で通らなければいけないプロセスである。今後もこのような経験がT児にとっては大切であり、T児なりに友達との関係を構築していってくれることを期待している。

## ～ 1年を振り返って ～

事例を検証する中で、一人一人の自己表現のあり方が、「伝達」「コミュニケーション」「思考」の3つに分けられるのではないかと考えた。T児の自己表現のあり方から見えてきたキーワードをその3つに分類して位置づけ、その図及び各事例より見えてきたことを考察する。

### <T児の自己表現の様相>



### ○考察

T児は、自分の思いを一方向的に話したり、決まった言葉を伝えたりといった情報の伝達は得意であるが、友達とのかかわりの中での言葉のやり取りが苦手であることが上の図にも表れている。もともと話すことは得意で、語彙も豊富である。事例2のような当番活動(ルーティンの活動)では、話す言葉が決まっているので、自信をもって話をしている。また、集団活動でも、友達が聞いてくれる態勢をとっていて、基本的には受け入れてくれる安心があるためか、思ったことをよく口に出している。しかし、したい遊びの時間は、自分で友達に向き合って伝える必要がある。しかも、受け入れてくれる保障はない。遊びに夢中になっていたら応えてもらえないこともあるだろう。そのようなことをT児は必要以上に不安に感じているように思えた。また、T児は教師が近くにいると必ずといっていいほど教師に話しかけてくる。教師は必ず応えてくれるし、T児の思いをくみとり応答関係も成り立つからであろう。しかし、結果的に友達と向き合うことを避けていることになっていることが多い。そこでT児が友達と応答関係を築くことができるよう、かかわってきた。

1学期は、友達と向き合うことを避けて、遠慮したり自分の本意ではないことを口にしたりすることがよくあった。友達が受け入れてくれなかったらどうしようといった不安が先に立ってしまい、事例1「自分の気持ちをごまかす表現」のような自己を防衛するための表現が多く見られていた。

2学期になると、教師を媒介としながら、遊びの中で自分の思いを友達に伝えたり、友達に答えたりするようになってきた(事例3)。また、事例1で自分を守るために思考をしていたT児が、2学期末には友達と一緒に遊ぶために思考を働かせるようになってきた。それに伴い、自分の思いを徐々に友達に伝えるようになってきた。

3学期には、友達の言葉を受け入れながら自分の思いを友達に伝える姿が見られた(事例5)。友達と一緒に前向きにがんばるために自分で考えて発した言葉であった。その時は結果的に相手に答えてもらえずに嫌な思いをすることになったが、これまで友達と向き合うことを避けてきたT児にとっては、貴重な経験であったと捉えている。

